

三つの五月のもの

(フランス)

昔むかし、アルデンヌの王さまに、たいそう美しいお姫さまがありました。あるとき、お姫さまは重い病気にかかりました。どんなお医者もお姫さまを治すことができず、王さまはたいへん悲しました。そして、深い森に住む占い師のおばあさんにみてもらうことになりました。おばあさんは、お姫さまをよくみたあと、頭をふつていました。

「お姫さまの病気を治すには、この国でいちばんみごとな五月のものもを三つめし上がりなければなりません。そして、治つてから七日以内に結婚しなければなりません」

王さまは、すぐにおふれを出しました。

「この国でいちばんみごとな五月のものを三つ持つてきた者を、姫と結婚させる」

國じゅうの若者が、運をためそようと、ももを入れたかごを持って城にやつてきました。けれども、お姫さまを治せるほどのみごとなものももを持ってきた者は、ひとりもいませんでした。やがて、城にやつて来る若者ばかりもいなくなりました。

近くの村に、母親と三人の息子が住んでいました。上のふたりはりっぱな若者でしたが、末の息子は小さくて少々頭が弱いと思われていました。

ある日、上の息子が、お姫さまの病気を治すために城に出かけることにしました。母親は、庭で取れたみどりとな五月のものを三つ、ていねいにふきんに包んで、かごに入れて持たせてやりました。

息子が歩いていくと、ひとりのおばあさんに会いました。おばあさんは、「かごの中に何を入れているのかね」とたずねました。息子は、「うさぎのふんだよ」と答えました。するとおばあさんは、

「じゃあ、おまえは、うさぎのふんを持つていくがいい」といました。

息子は城に着くと、かごを差し出しました。王さまがかごを開けてみると、ふきんの中には、なんと、うさぎのふんが入っていました。王さまは腹を立てて息子を追いかえしてしまいました。息子は、はずかしそうに家に帰り、何があつたか話そうとしませんでした。

しばらくして、二番目の息子が出かけることにしました。母親は前より念を入れて、庭の五月のもものなかでもいちばんみごとな三つを選んで、いちばん上等のふきんに包んでかごに入れてやりました。

息子が歩いていくと、おばあさんに会いました。おばあさんは、「かごの中に何を入れていいのかね」とたずねました。

「馬のふんだよ」

「じやあ、おまえは、馬のふんを持つていくがいい」

息子は城に着くと、かごを差し出しました。王さまがかごを開けてみると、ふきんの中には、なんと、大きな馬のふんが三つ入っていました。大きさは腹を立てて息子を追いかえしました。息子はうなだれて家に帰り、何があつたか話をうそとしませんでした。

やがて、末の息子も、出かけたいといいだしました。母親は、

「兄さんたちがふたりとも失敗したのに、おまえなんかうまくいくはずがない」といつて引き止めました。けれども、末の息子はどうしても行くといひはりました。そして、自分で、たいして選びもせずに、庭の五月のももを三つもぎ、ありあわせのふきんに包んでかごに入れました。

息子が歩いていくと、おばあさんに会いました。

「かごの中に何を入れていいのかね」

「ぼくのうちの庭のいちばんみごとな五月のももを二つだよ、おばあさん。お姫さまと結婚するんだ」

「じやあ、おまえは、いちばんみごとな五月のももを三つ持っていくがいい。お姫さまは、おまえと結婚なさるよ」

おばあさんはそういうと、息子に銀の笛を一本くれていいました。

「この笛を持っていきなさい。王さまが何かむずかしいことをいいだしたら、きっと役に立つだろう」

末の息子は、城に着くと、かごを差し出しました。王さまは、うたがわしそうにふきんをつまみ上げました。すると、この国でいちばんみごとな五月のももが三つ入っていました。王さまは喜んでさけびながら、お姫さまの所へももを持っていきました。

お姫さまは、ももをひとつ食べると、ベッドからとび下り、ふたつ食べると歌いだし、三つ食べるとおどりだしました。城じゅうの人たちが大喜びしました。

ところが、王さまは、ももを持ってきた百姓の若者を見て、こんなみすぼらしい若者とお姫さまを結婚させたくないと思いました。そこで、王さまは、若者を追いはらうために、

こんな問題もんだいを出しました。

「おまえに百匹ひやつひきのうさぎをあずけるから、四日のあいだ世話せわをするのだ。毎朝うさぎたちを森に連れて いつて草を食べさせ、夜には一匹残のこらず城に連れかえつてくること。それができたら、姫と結婚させよう」

つぎの日、若者は、うさぎを百匹任まかされました。ところが、森へ連れて いつと城の門を出たとたん、うさぎたちはあちこちに散らばつてはねていつてしましました。若者は走りまわつてうさぎをつかまえようとしたが、夕方、帰る時間になつても一匹もつかまえられませんでした。若者は泣なきました。

そのとき、とつぜん、若者は銀の笛のことを思い出しました。そこで笛を取りだし、ひと吹き吹いてみると、ぜんぶのうさぎが頭をもたげ、ふた吹きするとぜんぶのうさぎがかげよつてきて、三吹き目で、ぜんぶのうさぎが若者の前にならびました。若者は百匹のうさぎの先頭に立つて城にもどりました。そして、王さまに、

「どうぞ、自分で数えてみてください」といいました。王さまが数えると、うさぎは、ぴつたり百匹いました。

つぎの日、若者がうさぎを連れて森へ出かけてしまふと、王さまは、お姫さまをよんでもいました。

「おまえ、召使いのかつこうをして、あいつから、うさぎを一匹買つておいで」

そうすれば、百匹ぜんぶを連れて帰ることができないと、王さまは考えたのです。

お姫さまは召使いになりすまして森へ行き、若者に、

「うさぎを一匹売つておくれ」ともちかけました。若者は、

「これは売り物ものじゃないんだ。あんたが自分でかせぐものなんだ」と答えました。お姫さまが、

「どうすればいいの」とたずねると、若者は、

「ぼくにキスしてくれればいい。そうすれば一匹あげるよ」と答えました。お姫さまは、

若者にキスをして、うさぎを一匹もらうとエプロンに入れて、喜んで城に向かいました。

若者は、うさぎを集あつめる時間になつたので、銀の笛を吹きました。

お姫さまは、ちょうどそのとき、城の門をくぐろうとしていました。最初の笛のひと吹きが聞こえると、うさぎはお姫さまのエプロンから頭を出しました。ふた吹き目が聞こえ

ると、うさぎはお姫さまの手をふりはらって、地面にとびおりました。三吹き目が聞こえ
ると、ほかのうさぎたちといつしょに、若者の前にならびました。若者は、百匹のうさぎ
の先頭に立つて城にもどりました。

王さまはこまりはて、「こんどは、お妃をよんでいいました。

「おまえ、料理女のかつこうをして、あいつからうさぎを一匹買つておいで」

つぎの日、お妃は、料理女になりますし、金貨のいっぱい入ったさいふを持って、森へ
行きました。そして若者に、

「このお金で、うさぎを一匹売つておくれ」といいました。

「これは売り物じやないんだ。あんたが自分でかせぐものなんだ」

「どうすればいいの」

「草の上で三回とんぼ返りをするだけでいい。そうすれば一匹あげるよ」

お妃はこまりましたが、ほかにだれも見ていないので、思いきって三回とんぼ返りをし、
うさぎをもらつて帰りました。王さまは、お妃からうさぎを受けとると、小部屋にとじ
めてかぎをかけました。そして、

「こんどこそ、あいつは百匹のうさぎを連れて帰れないぞ」と思つて喜びました。

やがて、うさぎを集める時間になつたので、若者は銀の笛を吹きました。

ひと吹き目が聞こえると、うさぎは小部屋の天窓にとびあがり、ふた吹き目が聞こえる
と、城の堀をとびこえ、三吹き目が聞こえると、ほかのうさぎたちといつしょに、若者の
前にならびました。若者は、百匹のうさぎの先頭に立つて城にもどりました。

王さまは、かんかんに腹を立てました。

つぎの日、王さまは、商人に化け、ろばに乗つて森へ行きました。そして若者に、銀貨ひ
とぶくろでうさぎを一匹買おうといいました。

「これは売り物じやないんだ。あんたが自分でかせぐものなんだ」

「どうすればいいのだ」

「あんたがそのろばのおしりに、三回キスするだけでいい。そうすれば一匹あげるよ」

若者はそういうて、ろばのしつぽを持ちあげ、キスする場所を指差しました。王さまは、
たいへんこまりましたが、ほかにだれも見ていないので、思いきって、ろばのおしりに三
回キスをしました。そして、うさぎを受けとると、ろばを走らせ急いで城にもどりました。

うさぎは台所に運ばれ、毛皮をはがれて、なべに入れられました。王さまは、だんろの前で、うさぎを煮ながら大喜びでした。

さて、うさぎを集める時間になつたので、若者は銀の笛を吹きました。

ひと吹き目が聞こえると、うさぎはなべからとびだしました。ふた吹き目が聞こえると、テーブルの上にのせてあつた毛皮を着て、二吹き目が聞こえると、王さまの足のあいだをくぐりぬけ、階段をかけ下りて野原をとびこえ、ほかのうさぎたちといっしょに若者の前にならびました。若者は、百匹のうさぎの先頭に立つて城にもどりました。

ところが、王さまはまだあきらめようとせず、こんどはこんな問題を出しました。

「おまえは、みんなの前で、三つのふくろを真実でいっぱいにしなければならない。それ

ができたら、姫と結婚させよう」

それから、王さまは大宴会だいえんかいをもよおし、大勢おおぜいのお客きやくを招待しょうたいしました。

食事が終わるころ、王さまは若者をよんでも、三つのふくろを真実でいっぱいにするようにと命じました。そこで、若者はまず、お姫さまに向かつてたずねました。

「三日前、あなたは召使いのかつこうをして、森でうさぎの番をしているぼくの所に、うさぎを買いにやつて来ました。わたしは、あなたのキスと引きかえに、うさぎを一匹あげました。それはほんとうですか」

お姫さまは、

「ええ、ほんとうよ」と答えました。若者は、

「第一の真実、そら、ふくろに入れ」といつて、ひとつ目のふくろの口をしめました。つぎに、若者は、お妃に向かつてたずねました。

「二日前、あなたは料理女のかつこうをして、森でうさぎの番をしているぼくの所に、うさぎを買いにやつて来ました。わたしは、草の上で三回とんぼ返りをするのと引きかえに、うさぎを一匹あげました。それはほんとうですか」

「ええ、ほんとうです」

「第二の真実、そら、ふくろに入れ」

若者は、ふたつめのふくろの口をしめました。

つぎに、王さまに向かつていました。

「きのう、あなたは商人に化けてろばに乗り、森でうさぎの番をしているぼくの所に、う

さぎを買いにやって来ました。わたしは、ろばのおしりに三回キスをするのと引きかえに

「もうよい、もうよい」と、王さまはあわてて若者をさえぎりました。そして、「三つ目の

ふくろはもう入れなくともよい。姫と結婚するがよい」とさけびました。

お姫さまは、若者に知恵があることが分かつて大喜びでした。若者は、お姫さまと結婚して幸せい暮らしました。

*わたしも結婚式によばれて、うんとおしゃれをして行きました。くもの巣のドレスにバターの帽子、ガラスのくつ。ところが、野原を通つたらお日さまが帽子をとかし、氷の上を歩いたら、くつがカチカチ鳴りました。ほうら、話がふくろから出でしまつたよ。

* アルデンヌ フランス、ベルギー、ルクセンブルクにまたがる地方。

* わたしも結婚式によばれて、話がふくろから出でしまつたよ これで昔話はおしまいという意味の決まり文句。

『語りの森昔話集2ねむりねっこ』村上郁